

225 末梢肺癌に対する縮小手術例の検討 — 多施設共同研究集計結果 —

Osaka Lung Cancer Study Group

○桑原正喜，土井 修，森 隆，糸井和美，中原数也，藤井義敬，児玉 憲，安光 勉，古武彌宏，桑原 修，多田弘人，瀧 俊彦，斉藤幸人，相良憲幸，原 聡，良河光一，飯岡壮吾，澤村献児

目的：近年，癌の治癒と quality of life を考慮した縮小手術が種々の領域で再検討されている。肺癌における縮小手術について多施設の集計をもとにその予後を調査し，手術適応について検討した。

対象と結果：1987年までに在阪11施設で行った肺癌の縮小手術例（部分切除，区域切除）は男76例，女29例の合計105例であった。組織型内訳は腺癌51例，扁平上皮癌39例，大細胞癌3例，小細胞癌4例，その他8例で主として腺癌と扁平上皮癌を対象とした。5生率40%，腺癌36%，扁平上皮癌43%で腫瘍径2cm以下同58%，2～3cm46%，3cm以上19%であった。I期54%，II期48%でTN因子ではT₁54%，N₀49%で特にT₁ N₀ M₀では65%であった。他疾患の合併や心肺機能のために縮小手術となった消極的手術例では5生率33%で根治を目的とした積極的手術例では64%であった。他病死を除く5生率は消極的35%，積極的72%であった。再発様式は局所再発14例（13%），遠隔転移14例（13%）であった。

結論：腫瘍径2cm以下T₁ N₀ 腺癌，扁平上皮癌では肺葉切除に劣らぬ成績が期待し得る。

227 若年者肺癌（40才未満）とその推移 — 日本病理剖検輯報（1958～1987年）による検討 —

浜松医科大学病理学教室 ○森田豊彦

目的：演者は第24回以来本学会で日本病理剖検輯報の肺癌症例を中心に肺癌例の推移、肺癌含む重複癌、肺多発癌、気管癌と気管分岐部癌、肺肉腫等につき報告してきた。今回は剖検輯報の若年者肺癌につき検討報告する。方法：日本病理剖検輯報第1～30輯（1958～87年度症例）に登録された年齢・性別の明らかな肺癌症例につき病理組織型を含み検討し、高年者（70才以上）及び中年者（40～69才）との比較を行い、10年区分（第I～III期）してその推移を見た。

結果：1) 全体の傾向 40才未満症例は期別に男性257、366、400例、女性142、219、241例と実数が増加している。全肺癌例中の割合は期別に男性5、3、2%、女性8、5、3%へと漸減している。30才代も期別に男性4～1%へ、女性6～3%へと漸減していた。2) 男女比 肺癌全体の男女比は3.0前後だが、高齢者のそれは3.1～3.2、中年者は2.8～3.2と高く、若年者は1.7～1.8と低く、前2群に比し有意に低いと言えた。3) 若、中、高年者組織型割合 男女とも若、中、高の順に腺癌は漸減、扁平上皮癌と小細胞癌は漸増する。若年者群は他2群に比し、男女とも扁平上皮癌が有意に少なく、男性の腺癌が有意に多く、小細胞癌が有意に少ない。4) 若年者肺癌組織型割合とその推移 30年間の合計で男女とも腺癌が最も多く、男性50%、女性61%を占める。腺癌は男性44～56%、女性52～69%へと漸増、扁平上皮癌はII～III期に男性17～11%、女性12～7%と漸減。

226 腫瘍径2cm以下の末梢型肺癌の検討

大阪府立羽曳野病院外科¹、内科²、病理診断科³
岡田貴浩¹、岩崎輝夫¹、野崎俊一¹、尹 亨彦¹、
奥村明之進¹、中川勝裕¹、古武彌宏¹、
安光 勉¹、福岡正博²、菊井正紀³、森野英男³

【目的】末梢型の小型肺癌症例について、リンパ節・肺内転移について検索し、これらの症例に対する積極的縮小手術の可能性を検討した。

【対象】1978.1～1989.5 当科で肺切除術を施行した738例中亜区域支より末梢に発生した末梢型肺癌症例のうち切除肺において腫瘍径が2cm以下であった50例を対象としてretro-spectiveに検討を行った。

【結果】男性29、女性21。平均年齢64.2歳。組織型は、腺34届8小4大2カルチノイド2。臨床病期はI期32、II期7、IIA期7、IIB期1、IV期3であった。これら50例全体の3生率・5生率は75.6%、70.1%であった。更に、縮小手術の適応の面からリンパ節転移・肺内転移について考えた。N1a群(#13,#14)陽性例は5例(N2症例3、N1a症例2)で、N2症例の1例を除いた4例は原発巣と同じ肺区域にあり、区域切除により切除し得ると思われた。N1b群(#11,#12)陽性例は9例(N2症例4、N1b症例5)で、このうち1例は肺門部に再発を認めた。区切する際には、この群のリンパ節を特に徹底検索する必要があると思われた。肺内転移は3例に認めたが、転移個数は2個以内で、肺内転移の大きさも6mm以下であった。全例原発巣と同区域内にあり区切でも摘除し得ると思われた。

228 当科で経験した若年者肺癌28例の臨床的検討

順天堂大学呼吸器内科

○花里紀尚，桜庭晶子，饗庭三代治，見元達朗，高橋和久，山口 隆，貫和敏博，吉良枝郎

目的・対象：1977年1月から1989年5月までに当科に入院した肺癌症例668例のうち、40才以下の若年者肺癌28症例を対象に、性別・病期・組織型・受診動機・治療法などの臨床的特徴について検討した。

結果：28例の性別は、男性18例・女性10例（1.8：1.0）であり、当科の全肺癌症例の男女比3.1：1.0に比較して、女性の比率が高い傾向があった。病期は、Stage I 2例・Stage II 2例・Stage III 7例・Stage IV 16例で、進行癌が多い傾向がみられた。組織型は、男性では腺癌11例・類表皮癌3例・小細胞癌2例・大細胞癌1例・腺表皮癌1例で全男性肺癌症例に比べて腺癌の占める割合が高く、女性では腺癌9例・類表皮癌1例とほとんどが腺癌であった。受診動機は、原発巣による自覚症状を訴えて受診した症例が最も多く17例、転移症状での発症が7例、自覚症状がなく検診で発見されたのが3例、他疾患観察中に発見されたのが1例であった。自覚症状で最も多いのが咳・痰であり、転移症状は脳転移によるものが多かった。また、心タンポナーデで発症した症例が3例みられた。治療法は、手術7例・化学療法12例・放射線療法3例・無治療4例・不明2例であった。

結論：若年者肺癌は、性別では女性に多く、組織型では腺癌が多いのが特徴であった。また、進行例が多く、検診での発見例は少なかった。